

# 負の烙印のはじまりについて

## ——「ドイツ的」なものの意識形成と翻訳理論研究

山口裕之

### 1. 負の烙印の「はじまり」をたどる

第二次世界大戦後のドイツの特殊な思想的・社会的状況についてとくに深い知識をもつことなく、ハインツ・シュラッファーの著作『ドイツ文学の短い歴史』を読み始めると、その最初の章の冒頭でかなりショックを受けることになるだろう。この章はドイツ語では、Deutsch (ドイツ的) という一語が標題として掲げられている (邦訳では、「ドイツ的」とは何か) というよりわかりやすい標題となっている<sup>1</sup>。シュラッファーは次のような例を引き合いに出して話を始める。ドイツで中国学、ギリシア学、ロマンス語・ロマンス文学研究、英語・英文学研究を学ぶドイツ人学生に、なぜその専攻を選んだのかその理由を尋ねるとき、それらの対象に対する特別の愛情をもっているからと答えるのはごく自然なことである。ところが、同様にドイツ語・ドイツ文学研究 (Germanistik) を学んでいるドイツ人学生に対して、あなたがこれを専攻対象として選んだのはドイツに対しての特別な愛情があるからかと尋ねると、「かれらは気分を害してそのような推測を退けるだろう」。状況を移し替えて、日本で学ぶ日本人に日本語・日本文学を学ぶのは日本が好きだからか、フランスで学ぶフランス人にフランス語・フランス文学を専攻するのはフランスに対する特別の感情があるからかと尋ねる場合、必ずしもそれが当てはまらないとしても、その問いそのものに対して感情を害するということはあまり考えられない。「道徳的かつ政治的に揚げ足をとられないようにしなければならないと考えるドイツ人たちの間では、ドイツ文化への愛情告白など考えられないことだ。」ドイツ人が、自国の文化を学びながら、自国の文化への愛情告白を断固として拒絶しなければならないという異様な状況は、かつての教養主義的な価値観のなかでドイツ文化に対して絶対的といってよいほどの信頼を寄せていた、一定世代の日本人にとってはほとんど理解しがたいことでもあるだろう。

シュラッファーはさらに続けて、こういった特殊な状況の背景には次の二つの「格率・原則 (Maximen)」の存在が背景となっていると説明している。

1. ドイツ的なるもの (das Deutsche) は存在しない。
2. ドイツ的なるものは、悪しきものでしかない。

シュラッファー自身述べているように、この二つの「格率」は互いに矛盾する (ドイツ的なるものが存在しないのであれば、そもそも「悪しきもの」でもありえない)。しかし、この矛

1 Heinz Schlaffer, *Die kurze Geschichte der deutschen Literatur*. München: Carl Hanser, 2002. (Lizenzausgabe: Köln: Anaconda, 2013.) (ハインツ・シュラッファー『ドイツ文学の短い歴史』和泉雅人・安川晴基訳、同学社、2008年。)



盾そのものが暗示しているように、最初の「ドイツ的なるものは存在しない」という「格率」は、事実とは完全に相容れないものである。いや、「ドイツ的なるもの」がほんとうに存在するかどうかはともかくとして、少なくとも、「ドイツの本質」をめぐる言説は、18世紀末以降、とりわけ19世紀初頭から20世紀前半にかけて、山のように存在した。それにもかかわらず「ドイツ的」なものを躍起になって否定し、どうしてもその存在を認めなくてはならないときにはそれに対して「悪」の烙印を押すふるまいをとろうとするのは、いうまでもなくナチズムが過去のドイツの偉大な伝統を自らのうちに取り込み、利用していたことによって、「ドイツ的」なものがナチズムとの結びつきの痕跡を拭いがたくとどめてしまっていると感じられていたからである。戦後のドイツにとっては、「ドイツ的」なものを強固に否定しなければならないことが、あらたなドイツの文化と社会の特徴となるという逆説が生じていたことになる<sup>2</sup>。

「ドイツ的」なものは、おもに19世紀から20世紀前半にかけて、ドイツにとって「異質」なもの、とりわけフランスとの対抗関係において、ドイツにとってのポジティブな価値のイメージの総体として形成されていった。とはいえ、フランスとの対抗関係のなかでその価値が形成されてゆく場合、フランスの文化と社会が先進的でより優れたものであることを実際には認めざるをえないとすれば、フランスに対するドイツの優位性を強調する言説は、ある種のコンプレックスの裏返しの表現でもある。そういった事情から、いずれにしても「ドイツ的」なものは単純にポジティブなものとして考えることはできないものがあるのだが、ポジティブなものとしての言説が積み重ねられていったがゆえに、ナチズムは歴史的に形成されてきたそのイメージをナショナリズム的な意識を収束させるために動員していった。シュラッファは、そのように「第三帝国が犯した犯罪」(1933年—1945年)によって「悪しきもの」としての烙印を押されることになってしまった「ドイツ的」なものの起源をたどる身振りをとっている。「この第三帝国の犯罪への前史というのはいつ頃始まったのだろうか。とともに1918年以後始まったのだろうか。1900年前後の反ユダヤ主義からだろうか。バイロイト・サークルとともに始まったのか。ドイツの民衆的なるものと起源的なるものを美化したロマン主義からか。啓蒙主義から内面性へと転換した時期からだろうか。農民戦争からか。エルンスト・ユンガーからか。リヒャルト・ヴァーグナー

---

2 こういったメンタリティがいまでもなおドイツ社会に存続しているかということについては、少し留保が必要である。『ドイツ文学の短い歴史』の初版が刊行されたのは2002年と比較的最近(といってももう約20年前のことになる)のことだが、著者のハインツ・シュラッファは1939年生まれで、この著作の出版のときには63歳、シュトゥットガルト大学のドイツ文学教授だった。5歳から6歳にかけての年に終戦を迎えたこの世代だけでなく、ナチズムの支配とホロコーストについて学校教育ではっきりと批判的に学ぶ戦後のドイツ人にとっては、先に述べた二つの「格率」にみられるような「ドイツ的」なものに対する否定的態度、というよりも、「ドイツ的」なものを讃美するような身振りの拒絶は、社会において徹底して刷り込まれてきたものだった。その一つの外面的な表れとして顕著であるのが、ドイツの国旗を振ることがほぼタブー視されてきたことである。それが公然と許容されるのは、オリンピックやサッカーの世界カップのように、ナショナリズムを比較的健全に発揮できる場に限られていた。こういった「ドイツ的」なものの抑圧については、シュラッファの著作刊行のあと、さまざまな場で明確に風向きがかわっている。2006年にドイツで開催されたFIFAワールドカップが、その一つの転機になっていたということはいさば指摘される。2014年に始まるPEGIDA(「西洋のイスラム化に反対する愛国的ヨーロッパ人」)や、2013年に結成され、2015年の難民大量受入後、2017年に連邦議会ではじめて議席を獲得したAfD(「ドイツのための選択肢」)といった流れのなかで、「ドイツ的」特質を公然と掲げることの忌避は、大きく変質しつつある。

からか。エルンスト・モーリッツ・アルントからか。ヘルダーからか。それともすでにルター  
のときから始まっているのだろうか。」<sup>3</sup>ここで述べられているさまざまな概念や固有名詞  
について、本来ならば詳細な注釈が必要となるだろうが、ここではそれは省くことにした  
い。いずれにしても、第一次世界大戦直後から16世紀の農民戦争まで、また第一次世界  
大戦および第二次世界大戦の時代の只中を生き延びたエルンスト・ユンガーからやはり16世  
紀のルターまで、それぞれ「第三帝国の犯罪への前史」として、シュラッファーは「ドイ  
ツ的」なものの源をたどろうとしている。この言葉に続けて著者自身が述べているように、  
「ドイツ精神史におけるいかなる現象であれ、…民族主義的な思考やナチ的行動の準備に  
加担してきたのではないかという推測から免れることのできるものはほとんどない」。そ  
れにもとづいてドイツの巨大な犯罪という不幸のはじまりの地点を過去のある地点に遡っ  
て求めてゆくことは、いわゆる「ドイツの特別な道 (deutscher Sonderweg)」という考え方を  
典型的に表すものである。

とはいえ、それはあくまでもレトリック上の身振りであって、著者が指摘しているよう  
に、ドイツ的なものを指し示す「本質」のようなものを語ることは、戦後ドイツにおいて  
はほぼ忌避されている。研究領域としての「ドイツ文学研究 (Germanistik)」は、ドイツの  
文学を対象としているにもかかわらず、その国民文学としての特質や位置づけから逃れな  
ければならないという自家撞着のうちにある。「ドイツ文学研究は、それがまるで自己に  
ついて語っていないかのように振る舞うときにのみ、自己について今後も語ることが許さ  
れるのである。」<sup>4</sup>

## 2. トーマス・マンの語る「ドイツ的」なもの

戦後のドイツ文学史の記述が、このような矛盾を（意識的・無意識的に）隠蔽しつつ、  
ドイツの文学について語らざるを得なかったという状況を、ハインツ・シュラッファー  
は挑発的に指摘する。それに対して、1945年に亡命先のアメリカでドイツの敗戦に向き  
合うことになったトーマス・マンにとっては、19世紀的な価値を引き継ぐ証言者として、  
その衝撃のなかにあっても、「ドイツ的」な特質について明示的に語る事がまだ可能で  
あった。

トーマス・マンは、1933年1月末にヒトラーが政権を掌握したあと、2月には旅行先の  
スイスにそのままとどまり、さらに1938年にはアメリカに移住している（この間、1936年  
にはナチスによってトーマス・マンはドイツ国籍を剥奪される）。ドイツが1945年5月8日に  
降伏した3週間ほど後の5月29日に、ワシントンのアメリカ議会図書館で行われた英語  
での講演「ドイツとドイツ人」で、マンは、まさにこの時点でそしてドイツ人がアメリカ  
で語るという状況において、ドイツ的なものとは何かという問いについて語ることを自ら  
選ばざるを得ないと感じていた。このマンの試み自体が、ドイツ的なものの「本質」を探

3 Schläffer, *ibid.*, p. 8. (邦訳 10 頁。)

4 Schläffer, *ibid.*, p. 14. (邦訳 20 頁。翻訳に適宜変更を加えている。)

ろうとする、ドイツの知識人の特質を如実に示すものであるともいえるが、それによって、主に19世紀初頭からこの講演の時点にまで至る、「ドイツ的」なものをめぐる言説のいくつかの主要なキーワードが明示的に示されることになった。

小さな領邦国家が分立し、その政治形態においては「神聖ローマ帝国」という名目的な統合体がアイデンティティ形成にかかわる要素がかなり小さいなかで、複数の領邦を横断する「ドイツ」という一つのネーションが力強く生み出されていくときには、多くの場合、異質なものと対峙することによって、外側からアイデンティティの輪郭が規定されることが決定的な要因となる。19世紀から20世紀前半にかけてのドイツのナショナリズム形成にとって<sup>5</sup>、その「異質なもの」として最も強力に機能したのは、なによりもフランスである。ナポレオンによるドイツの諸領邦の侵攻と支配（1806年の「ライン同盟」の成立とそれによる神聖ローマ帝国の消滅）、そしてライプツィヒでの「諸国民の戦い（Völkerschlacht）」（1813年）を頂点とするフランスへの反撃とその最終的な勝利は、ドイツ近代の「組織化されたナショナリズム」<sup>6</sup>の出発点となる。その後、1848年の三月革命、1870年から71年にかけての普仏戦争およびそれと結びついたドイツ帝国によるドイツ統一（1871年1月）、そして第一次世界大戦は、ドイツのナショナリズム形成にとって特別な意味をもつものとなっている。

第一次世界大戦の勃発に際してトーマス・マンはドイツ支持の立場を明確に示す。1915年秋に執筆を始めた『非政治的人間の考察』では、フランスに対置されるさまざまなドイツ的特質をポジティブに提示するための二項対立的な概念が提示されているが、これは彼に固有なものというよりも、18世紀後半から19世紀にかけて積み重ねられてきたドイツ的な特質をめぐるディスコースを総括するものでもある。「精神と政治の差異は、文化と文明、魂と社会、自由と選挙権、芸術と文学の差異を包括している。そしてドイツ精神、これは文化であり魂であり自由であり芸術であって、文明、社会、選挙権、文学ではないのだ。」<sup>7</sup>このあと、ワイマール期からナチズムの時代にかけて、トーマス・マンの政治的姿勢は大きく移り変わってゆくのだが、1945年5月にナチズムの敗北とドイツに対して与えられた決定的な負の烙印を前にして、それでも「ドイツ的」なものについて語るをえない状況に置かれたとき、彼が「ドイツ的」特質として描き出すものそのものは——そこではもはやポジティブに提示することが極端に困難になっているにもかかわらず——第一次世界大戦のときに彼がドイツについて語ったキーワードと価値の枠組を基本的には継承したものである。

講演「ドイツとドイツ人」は、ドイツの敗戦直後というタイミングで語られたものではあるのだが、もともとは1945年1月から計画されていたアメリカ東部での講演旅行のための原稿として、1944年11月頃から構想と資料収集が進められ、1945年2月27日から3月18日にかけてドイツ語で執筆されていたものだった。健康上の理由で予定されてい

5 Cf. Otto Dann, *Nation und Nationalismus in Deutschland, 1770-1990*, 3. Auflage, München: Beck, 1996. 曾田長人『人文主義と国民形成——19世紀ドイツの古典教養』知泉書館、2005年。

6 Christian Jansen/Henning Borggräfe, *Nation, Nationalität, Nationalismus*, Frankfurt/M.: Campus, 2007, pp. 43-44.

7 Thomas Mann, *Gesammelte Werke*, Band XII, Fischer 1960, p. 31. (『トーマス・マン全集 XI』新潮社、1972年、27頁。)

た講演旅行を中止した後、2月1日には5月29日のアメリカ議会図書館での講演の日程がすでに決定されていた<sup>8</sup>。「ドイツ人としては、今日このテーマを避けるべきでしょうか。しかし、私は今夜のために、これ以外に一体どんなテーマを選んだらよいか、ほとんど考えもつきませんでした。」<sup>9</sup>講演の冒頭近くで述べられているこの言葉がトーマス・マンのこのときの気持を率直に伝えるものであるということに疑いを入れる余地はない。しかし、ここで語られていることは、ドイツの敗戦という結果的に付随してきたできごととは直接的には関係なく、この時期に執筆していた『ファウストゥス博士』とのテーマ的なつながりのもとで選ばれていたものだったということになる。

戦時中にせよ、ドイツの敗戦直後にせよ、トーマス・マンが「ドイツとドイツ人」の講演原稿を執筆し実際に講演をおこなっていた時点では、「ドイツ的」な特質として表象されるものの総体を表す「ドイツ性 (Deutschtum)」「ドイツの本質」「純ドイツ的 (kerndeutsch)」といった言葉——戦後のドイツ社会・教育の場では、ときにはヒステリックなまでの反応をともなって拒絶されてきた言葉——が、まだごく素朴に用いられている。ナチズムの犯罪へといたったものを批判的に検証しながら、「ドイツの本質」を浮き上がらせてゆくことがこの講演の目指すことではあるのだが、おそらくそれ以上に、トーマス・マンにとってここで語られているドイツとドイツ人の特質は、まさに「ドイツ的」という、本質的なものを志向する言葉を冠することによってしか語り得ないような実体感をともなう概念として表れていたといえるだろう。

そのような「ドイツ的」特質としてとりあげられているもののうち、他の特質がすべてそこに関わってくる「内面性 (Innerlichkeit)」という概念は、特別な重要性をもつものである。トーマス・マン自身が、「ドイツ人のおそらく最も有名な特質」<sup>10</sup>と述べているように、「内面性」と呼ばれているものは、18世紀末から20世紀前半にかけて形成されていった「ドイツ的」なものをめぐるディスコースのなかで、繰り返し意識され言説化されてきたものだった。ドイツの「感傷主義 (Empfindsamkeit)」の詩人クロップシュトックが、1779年にこの言葉を彼自身もかかわる新しい文学のあり方として用いたことが知られているが、「内面性」はとりわけロマン派の特質と結びつけられながら、基本的にはポジティブな価値を与えられてきた<sup>11</sup>。例えばニーチェが『反時代的考察』のなかで、ドイツの文化と社会に対

8 Thomas Mann, *Essays Band 5: Deutschland und die Deutschen 1938-1945*. Fischer 1996, pp. 433-434 (Entstehung).

9 Mann, *ibid.*, p. 261. (トーマス・マン『講演集 ドイツとドイツ人 他五篇』青木順三訳、岩波文庫、1990年、8頁。)

10 Mann, *ibid.*, p. 275. (『ドイツとドイツ人』、29頁。)

11 Cf. *Historisches Wörterbuch der Philosophie*, hrsg. von Joachim Ritter. Band 4, „Innerlichkeit“. ここでは、Friedrich Gottlieb Klopstock, *Über Sprache und Dichtkunst*. Herold, 1779, p. 252 が、ドイツでの Innerlichkeit という概念が最初に提示されたテキストとして紹介されている。19世紀を通じてこの概念は、ドイツの特質を形成する重要な要素として繰り返し言語化されてゆくが、それを受けてナチズムの時代には、例えば、Ulrich Christoffel, *Deutsche Innerlichkeit*. Piper München: Piper, 1940 というモノグラフィーも刊行され、また „Die deutsche Innerlichkeit“ をサブタイトルとして冠した、シリーズものとして企画されたドイツ文学の出版も見られる。Cf. Hans Johst, *Der Weg des Dichters zum Volk. Die deutsche Innerlichkeit*, Berlin: Frundsberg, 1933; Richard Bie, *Stefan George. Richter der Zeit - Kün der des Reichs. Die deutsche Innerlichkeit*, Berlin: Frundsberg, 1934.

して「内面性」のもつ特質が与えた影響について批判的指摘をおこなう際にも、そこではドイツにおいて「内面性」がポジティブな価値として流通していることが前提となっている<sup>12</sup>。

トーマス・マンは「ドイツとドイツ人」のなかでこの「内面性」という言葉を引き合いに出すとき、「繊細さ、心の深淵さ、非世俗的なものへの没入、自然への敬虔さ、思想と良心とのこの上なく純粋な真剣さ、要するに高度な抒情詩の持つあらゆる本質的特色が、この中でまじり合っております<sup>13</sup>」という言葉によって説明しようとしている。これは、マン自身が自分のもつドイツ的資質（彼は他の箇所ですそれを *Deutschtum* という、戦後のドイツ社会で完全に拒絶されることになったと思われる言葉によって言い表している）として、その意味できわめて大切な価値をもつものとして、感じとっていたものといえるだろう。それは、ナチズムの暴虐に体现されるものと世界のなかで捉えられていたドイツ的資質の対極をなすものであり、どれほどドイツが悪魔的所業を働こうとも、それとは別に、「ドイツの形而上学、ドイツ音楽、とりわけドイツの奇跡<sup>14</sup>」に示されるような「ドイツ人の内面性」のもたらした歴史的業績については、その価値は減じることはない、という論理となって語られることになる。

トーマス・マン自身は、一方で、そのような言葉によって「ドイツ人の内面性」をポジティブに提示しながらも、他方で、その特質が最も顕著に現れたドイツ・ロマン派について語る際には、「多くの憧憬に満ちた夢想的なもの、幻想的で妖気を漂わせたもの、深淵で風変わりなもの、それにまた高度な芸術的洗練、あらゆるものを越えて漂うイロニー」といった一般にポジティブに受け止められている資質ではなく、むしろ「ある種の暗い力強さ」や「地底の世界に通じるような非合理的な生命力」という側面を強調しようとしている<sup>15</sup>。ロマン派は、繊細で高度に洗練された現れ方をするとともに、むしろ病的で非合理的な特質をもつものであり、それによって、ナチズムにおいて「ドイツのロマン主義はヒステリックな蛮行となり、傲慢さと犯罪との陶酔、痙攣となって爆発<sup>16</sup>」したと総括される。このように語られる「ドイツの〈内面性〉の歴史」は、トーマス・マンがこの講演のなかでとりあげているドイツのさまざまな特質——世界市民的でありながら田舎者的な気質と世界に対する内気さをもつこと、音楽におけるデーモン的な特質、ルターに顕著に見られるような粗野で怒りっぽい気質、偏狭な国粹主義のために真の「自由」をもたないこと——をすべて包摂している。ドイツとドイツ人のさまざまな特質を語りながら、トーマス・

12 ニーチェは、『反時代的考察』において、普仏戦争の勝利とドイツ帝国の誕生に時代に「教養俗物 (Bildungsphilister)」のいう「教養性 (Gebildetheit)」に対置される「真実のドイツ的教養」(『ニーチェ全集 4 反時代的考察』小倉志祥訳、ちくま学芸文庫、1993年、11頁)や「ドイツ精神」(18頁)、「真正の根源的ドイツ文化」(19頁)を掲げる一方で、「内面性の有名な民族」(157頁)であるドイツ人が陥る危険性について指摘する。

13 Thomas Mann, *Deutschland und die Deutschen*, p. 275. (邦訳 29 頁。)

14 Mann, *ibid.*, p. 275. (邦訳 29 頁。)

15 Mann, *ibid.*, p. 276. (邦訳 30 頁。)

16 Mann, *ibid.*, p. 279. (邦訳 35 頁。)

マンはそれらをドイツの「内面性」として知られるキーワードに集約させ、そしてその負の側面をナチズムへと流れ込んでいった特質として説明しているといえるだろう。

### 3. 翻訳思想における「ドイツ的」伝統

はじめに言及した『ドイツ文学の短い歴史』のなかで著者のシュラッファーは、ドイツ文学研究 (Germanistik) が、その文学史記述においてナチズムの時代をいわば括弧入れ、それを除外した対象に依存していることを方法論的議論の背後に隠蔽しており、「ドイツに特殊なもの、ドイツにしかないものを孕んでいるのではないか」という問題に、真摯に向き合うことを避けている」という挑発的な問題提起をおこなっている<sup>17</sup>。このことは、「ドイツ的」な特質が本来ならば問題となってくるはずの他の領域についても、おそらく同じようにあてはまるのではないだろうか。トーマス・マンの講演は、ドイツ敗戦の時期に、いわば半分はドイツの外側から見た、自己批判的なまなざしによっておこなわれた、著名なドイツ知識人の分析の試みであるというコンテクストにおいて、基本的に一定の評価を得て受け止められている。しかし、戦後の一定世代においては（おそらく現在でもなお）「ドイツ性 (Deutschtum)」という言葉を使って「ドイツ人の本質」について語ることは、否が応でもナチズムの語法を連想させるものとして、受け入れがたいものとなっている<sup>18</sup>。そこで否定されているのは、「ドイツ的」であるとかつてみなされてきたさまざまな特質について語ることであり、その特質について語ることに単に個々の現象的側面ではなく、「本質」を言い表しているという身振りである。つまり、「ドイツ的」なものの個々の内容とともに、ここでは「本質」を語ろうとする志向そのものが「ドイツ的」なものとして否定されているということになるだろう。

「ドイツ的」なものの「国民的」本質に向かうような議論を回避するスタンスは、「ドイツ文学」とともに、本来ならば「ドイツ的」なものにかかわらざるを得ないはずの他の領域においても、その学問分野に対して大きな制約を加えていたことになるかもしれない、と先に言及した。そのようなものとしてここで取り上げたいのは、ドイツ文学・哲学に隣接する翻訳思想の領域である。翻訳は本質的に異質なものとのかかわりを前提としている。少なくとも、その異質なものに直接向き合うことになる翻訳者にとって、翻訳はそこで対峙する他者性によって自分自身の言語・文化のアイデンティティの輪郭が与えられる場となる。

ドイツ語への翻訳がドイツにおいてきわめて積極的に推し進められてきたという伝統は、単にドイツ母語話者にとって外国語で書かれたテキストが読めるようになるという利便性にかかわる事情をはるかに越えて、それ自体がかなりの程度ドイツに特有の現象とし

17 Schläffer, *ibid.*, p. 10. (邦訳 12 頁。)

18 例えば、1930年に刊行されたアルフレート・ローゼンベルクの『二十世紀の神話』では、Deutschtum という言葉が著作全体で 15 回用いられている。(ドイツ語の全文テキストの PDF として、以下のサイトを参照。 <http://www.thule-italia.net/Storia/LibriTedesco/Rosenberg%20Alfred.%20Der%20Mythus%20im%2020.%20Jahrhundert.pdf>) 「本質 (Wesen)」の語は、複合語も含めて 560 回以上用いられている。

て、ドイツ人自身およびドイツに通暁する外国人に意識されていた。フランス的な社交性に著しく欠け、「表面的なことにはほとんど無能」で、「理解するためには深く掘り下げることを必要とする」と19世紀初頭のドイツ人について評したスタール夫人は、「翻訳の技術は、ドイツ語ではヨーロッパの他のどの言語よりも進んでいる」と述べている<sup>19</sup>。スタール夫人の『ドイツ論』が最終的に刊行されたのと同じ年、1813年にベルリンでおこなわれたシュライアーマッハーの翻訳論講義「翻訳のさまざまな方法について」のなかでも、シュライアーマッハーは、ドイツ人がそれまで翻訳という行為について際立って積極的であったという事実を次のような表現のなかで言い表している。「我が国民に与えられた天命が独特なものであることがわかる内的必然性、これが私たちをみな翻訳へと駆り立ててきたのです。」<sup>20</sup>

そのような「翻訳欲動」がどれほどドイツ的な特質にかかわるものであるかを、ドイツ・ロマン主義の翻訳理論に焦点を当てたアントワーヌ・ベルマンの著作『他者という試練』は、その序文で次々と列挙している<sup>21</sup>。ここでは、ライプニッツにはじまり、ゲーテ、A. W. シュレーゲル、ノヴァーリス、シュライアーマッハー、フンボルトが、ドイツ人にとって翻訳がどれほど決定的な特質をなすものであるかを証言するために呼び出されている。なかでも決定的な表現を与えているのはノヴァーリスである。ベルマンが引用しているA. W. シュレーゲルに宛てた1797年11月30日のノヴァーリスの書簡はきわめて重要な証言であり、ここではベルマンの引用の前後も含めてそこでの表現を提示しておきたい。

われわれドイツ人はこれまで翻訳をおこなってきましたが、そして翻訳をしたことのない重要なドイツの作家などほとんどおらず、自分が書いた作品に対するのと同じくらい翻訳をほんとうに自慢に思うほど翻訳の嗜好がこれほど国民的な資質(national)となっているのですが、翻訳ほどなにも教えられないままになっているものはほかにはないように思われます。われわれのところでは、翻訳は学問となり芸術となっています。あなたの〔翻訳した〕シェイクスピアは、学問的な観察者にとってのすぐれた規範です。翻訳の欲動をこれほどまでに抗い難く感じ、このように際限のないほど多くの教養をこの翻訳欲動に負っているのは、ローマ人をのぞいて、われわれがその唯一の国民(Nation)なのです。だから、われわれと末期ローマの文学文化のあいだには多くの類似性があるのです。この欲動は、ドイツ民族のきわめて高い、根源的な性格の表示するものとなっています。ドイツ性(Deutschheit)とは、最も力強い個性と混じり合ったコスモポリタニズムなのです。われわれにとってのみ、翻訳物は拡張されたものとなっていたのです。真の翻訳にかかわるためには、詩的な道德性が、また愛情を犠牲にすることが必要とな

19 スタール夫人『ドイツ論1』梶谷温子・中村加津・大竹仁子訳、鳥影社、2000年、97頁、および『ドイツ論2』中村加津・大竹仁子訳、鳥影社、2002年、53頁。

20 Friedrich Schleiermacher, Ueber die verschiedenen Methoden des Uebersetzens, in: Hans Joachim Störig (Hg.), *Das Problem des Übersetzens*. Darmstadt: Wissenschaftliche Buchgesellschaft, 1969, p. 69. (シュライアーマッハー「翻訳のさまざまな方法について」、三ツ木道夫編訳『思想としての翻訳』白水社、2008年、68頁。)

21 アントワーヌ・ベルマン『他者という試練 ロマン主義のドイツの文化と翻訳』藤田省一訳、みすず書房、2008年、26-27頁。

ります。翻訳は、美への、そして祖国の文学へのほんとうの愛からおこなわれるのです。翻訳とは、自分自身の作品を生み出すのと同じように詩作するということです。さらに困難で、さらに類稀なものですが。結局のところ、あらゆるポエジーは翻訳なのです。ドイツ語のシェイクスピアは、いまや英語のシェイクスピアよりもすぐれたものであることを私は確信しています。[...] <sup>22</sup>

この書簡は、A. W. シュレーゲルのシェイクスピア翻訳に対するある書評をめぐって書かれたものであり、そのコンテクストからこのノヴァーリスの言葉を理解することが必要であるとともに、ここには古典古代への回帰や、あらゆるものをポエジーの創造的原理へと集約させようとするドイツ初期ロマン派に特有の要素を指摘することができる。しかし、それらをうちに含みながら、18世紀末から19世紀初頭に明確に形成されたのち、ほぼ150年のあいだ引き継がれ、さまざまな銜を見出してゆくことになるドイツのナショナリズム的意識のさまざまな表れが、ここにはきわめて明確に見てとることができる。ドイツ人がこれまできわめてきわめて多くの翻訳をおこなってきたこと、その「翻訳の嗜好 (Hang des Übersetzens)」は、それ自体が「国民的」なものであるという意識は、先にもふれたように、ドイツ内外のさまざまなところで共有されている。ノヴァーリスはそれを「翻訳の欲動 (Trieb des Übersetzens)」というさらに強い言葉で呼び、それを「ドイツ民族」の特質、「ドイツ性」という概念化された表現へと結びつけてゆく。

興味深いのは、そのような「翻訳の欲動」と結びつけられた「ドイツ性」が、「コスモポリタニズム」と言い表されていることである。この表現は、否が応でも「ドイツとドイツ人」のなかでのトーマス・マンの言葉を連想させずにはおかない。マンは講演の冒頭で、世界に対する内気さ（「地方特有の偏狭さ Provinzialismus」）と世界を求める性向（「コスモポリタニズム Kosmopolitismus」）というドイツ人の両極性について言及している。とはいえこの両極を、「非世俗的で田舎者的なドイツの世界市民性」という言葉によって結びつけたとしても、強調点は決して「世界市民性」に置かれてなどいない。同じように、ノヴァーリスが「コスモポリタニズム」という言葉を使っているときにも、そこではドイツがヨーロッパのなかでの一つの地方の存在であるという意識が厳然としてあることが前提となっている。「国民」として意識された「ドイツ」がヨーロッパの文化的勢力においてあらたな地位を獲得するためには、過去のあるいは同時代のよりすぐれた文化的伝統とのつながりを確保しなければならない。ギリシア・ローマの古典的文献の翻訳、シェイクスピアなどイギリスの作品の翻訳は、そのようなすぐれた世界へと開かれ結びついていることの足場であり、ノヴァーリスがまさに言い表しているように、ドイツ内部の精神的伝統が外へと「拡張されたもの (Erweiterungen)」という具体的な表れとなる。

古典古代の作品の翻訳は、いまでは存在しない聳え立つような卓越した文化を規範とするまなざしに支えられたものであり、そこには優れたものに対する劣等意識が生まれる余

---

22 Novalis, *Schriften*. Bd. 4: Tagebücher, Briefwechsel, Zeitgenössische Zeugnisse. Hrsg. von Richard Samuel in Zusammenarbeit mit Hans-Joachim Mähl und Gerhard Schulz. Stuttgart: Kohlhammer, 1998 (2. Aufl.), S. 237–238. ベルマン『他者という試練』27頁参照。同書第7章(219–222頁)でもこの箇所についての引用と重要な考察がある。

地は存在しない。「ドイツ」という「国民 (Nation)」がヨーロッパの文化地図のなかですぐれた存在であろうとする自己意識をもつとき、古典古代と結びつくという身振りは、なんのてらいもなくおこなうことができる。自らプラトンの翻訳を行っていたシュライアーマッハーも、そのようにして古典古代のテキストの翻訳を引き合いに出している。しかし、同じくドイツ語への翻訳にかかわる問題として英語、そしてとりわけフランス語を念頭に置いて（あるいはそれらを含めて）論じられているときには、同じ次元のことがらを扱うかのように語られているとしても、翻訳の問題は別の意味合いを帯びてくる。

おそらく異邦の植物をさまざまに移植することによってはじめて、私たちの土地そのものもより豊かで実り多いものとなり、風土もまた優美で穏やかなものになってきました。同じように、私たちの言語もまた、北方的な鈍さのために私達が自分でそれを動かすというよりも、異質なものとのかきわめて多様な接触を通じてのみ、真に生き生きと成長し、それ自身の力を完全に展開することができるのだと、私たちは感じています。これは次のことと関連しているように思われます。すなわち、私たち〔ドイツ〕民族は、異質なものに対する敬意をもち、仲介者的な本性をもっているために、異邦の学問や芸術のあらゆる宝と自分自身の学問や芸術の宝とを、同時にまたドイツ語において、いわば大きな歴史的全体性へと統合するようにと定められている、ということです。この歴史的全体性はヨーロッパの核心となるところに保たれなければなりません。それは、われわれの言語〔ドイツ語〕の助けによって、さまざまな時代がもたらしたすばらしいものを、誰もがほんとうに純粋で完全に享受することができるためです。それは異邦人 (Fremdling) にのみ可能なことです。<sup>23</sup>

シュライアーマッハーの翻訳論の頂点をなすといってもよいこの箇所では、ドイツ人が翻訳に特別の性向を示してきたという現象を、シュライアーマッハーは「異質なものに対する敬意」という言葉に集約している。この「異質な (fremd)」もの、「異邦の (fremd)」学問や芸術の宝と呼ばれているものが、「さまざまな時代」にかかわるものであることは、このテキストで言及されているものからも首肯される。シュライアーマッハー自身の註のなかでフォスのホメロス翻訳や A. W. シュレーゲルによるシェイクスピア翻訳について言及されているように、またフリードリヒ二世がフランス語を使っていたことについて、控えめながらもあまりポジティブではない評価を与えているように、シュライアーマッハーはたしかにさまざまな時代、さまざまな言語を念頭に置いて語っている。しかし、ライプツィヒでの「諸国民の戦い」の4ヶ月ほど前、1813年6月にベルリンの王立アカデミーで語られたこのシュライアーマッハーの言葉が、その特別な歴史的コンテキストのなかで生み出されたものであることは明らかである。目標言語の読者にとって自然でわかりやすい翻訳ではなく、作品が書かれた「異質な」言語（外国語）とその文化に最大限寄り添った翻訳、つまりそれによって翻訳の技術の低さを指摘されるというリスクをとるような翻訳をシュライアーマッハーがあえて主張するときの語調には、特別の熱意がこもっている。「私たち

23 Störig (Hg.), *Das Problem des Übersetzens*, p. 69. (三ツ木道夫編訳『思想としての翻訳』68頁参照。ただし、引用は山口訳。)

は後戻りできません。突き進んで行かなければならないのです。」異質なものを自ら積極的に取り込もうとすることは、たしかにそれまでも意識されていたドイツ的な現象であった。しかし、ドイツ的なものが危機にさらされている特別な状況にあつては、異質なものをむしろ取り込むことによって自己を高めていこうとすることは、きわめて逆説的な戦略であることが当然意識されている。この熱気は、自らを「異邦人」とさえ位置づけて、外のすぐれたものを取り入れなければならないという危機的な意識によつてもたらされている。

#### 4. 自ら語り得ない「ドイツ性」——「他者」のまなざしによつて可能となるドイツ翻訳思想研究

そのような危機意識は、シュライアーマッハーの翻訳論では、かなり控えめなかたちでしか見てとることができない。シュライアーマッハーの講演から数年遡り、同じくナポレオン戦争時代の1806年に、ナポレオンを盟主として作り出されたライン同盟によつて、神聖ローマ帝国が名実ともに消滅したその翌年、1807年にベルリンで行われたフィヒテの講演「ドイツ国民に告ぐ」では、この危機意識がきわめて明確に表れ出ている。そこでは、フランスの言語と文化の優位性とドイツ語・ドイツ文化の後進性というそれまでの一般的なイメージを完全に逆転させる言説となつて表れる。フィヒテにとつてフランス人(ロマンス語の民族)は、もともとと同じゲルマン民族に由来しながらも、「ゲルマンの根を捨て去り、ローマの根から言葉を作り出す」こと、「宮廷語・教養語としてのロマンス語を生み出す」ことをおこなつてきたがゆえに、「死んだ言語の民族」とされる。それに対してドイツ人は、「生きた言語の民族」であり、その言語は「根源的生命」「精神的生命」と深く結びついている<sup>24</sup>。フィヒテ自身、「ゲルマン起源の言葉」が野卑なものとなされ、「ローマ起源の言葉」が「高貴で高尚なもの」とされてきた歴史的経緯を当然ながら意識し、そのような意味での外国崇拜がドイツ人のうちにあると言及している。「われわれの耳にもローマ的な音声は高尚に響き、われわれの目にもローマ的な習俗は高貴に見える。それに対して、ドイツ的なものは下等に見える。」<sup>25</sup>ここでフィヒテは、根源・精神・生命、そしてそれらにもとづく「哲学」と「詩作(Dichtung)」をドイツ語に結びつけることによつて、歴史的にはラテン語、ついでフランス語に対して、野卑なもの、高貴ではないもの、下位のものとして位置づけられてきたドイツ語を、反対により優れたものへと転化している。こういったロジックは、19世紀から20世紀初頭を通じて、フランスとの政治的・文化的対立が表面化してナショナリズムが発動されるたびに露骨に言説化されることになった。普仏戦争の勝利とドイツ帝国の誕生の時代に書かれたニーチェの『反時代的考察』(ニーチェはビスマルクに象徴されるようなドイツ帝国の支配的メンタリティに鋭い批判を投げかけるが、その根底には本来的なドイツ的特質と彼が考えるものに対する理想がある)、第一次世界大戦のあいだ

24 Johann Gottlieb Fichte, *Reden an die deutsche Nation*, Hamburg: Felix Meiner, 2008, p. 85, 78. (『フィヒテ全集 第17巻』早瀬明・菅野健・杉田孝夫訳、哲書房、2014年、90頁、82頁参照。引用は山口訳。)

25 Fichte, *ibid.*, p. 90. (『フィヒテ全集 第17巻』90頁。引用に際して適宜翻訳に修正を加えている。)

に執筆されていたトーマス・マンの『非政治的人間の考察』は、そのことがきわめて明確に現れた典型的な例と見ることができるだろう。

こういったテキストでは、フランス文化、フランス語に対するドイツ的なものの優位性がさまざまなかたちをとって表れ出ることになるが、この優位性の意識は、フィヒテのレトリックにも随所に見てとれるように、歴史的に形成されてきた劣等意識を前提としながら、価値の組み換えによって従来の位置づけを逆転させたものである。このことは、二つの言語のあいだの関係性が必然的に内部に組み込まれることになる翻訳において、顕在的なナショナリズム的意識とは別のかたちをとって構造化されることになる。翻訳理論家ヴェヌーティが *The Translator's Invisibility* のなかで、シュライアーマッハーの翻訳論を引き合いに出しながら浮かび上がらせているのは、まさにこの翻訳における非対称的構造の問題である<sup>26</sup>。

トランスレーション・スタディーズの短い歴史のなかでも非常に重要な論点と鍵概念を与えることになったヴェヌーティのこの著作は、英語圏での翻訳においては、英語の文化的優位性のために目標言語である英語の読者にとっての翻訳の「自然さ」が何よりも重視され、それとともに翻訳者および翻訳という行為そのものの価値が評価されず、「目に見えない」状態になっているという問題提起を出発点としている。ヴェヌーティは、英語圏におけるこの「同化的翻訳」の傾向のうちに含まれる「翻訳の暴力」の批判的検討をおこない、それに対して「異質化翻訳」という翻訳戦略を支持する立場をとる<sup>27</sup>。ヴェヌーティがこの著作でシュライアーマッハーをとりあげているのは、一つには、シュライアーマッハーの「翻訳のさまざまな方法について」の結論が、ヴェヌーティのいう「異質化翻訳」を目指す主張となっているからである。しかしそれとともに、シュライアーマッハーがとりあげられる第3章の標題「ネイション」が示しているように、シュライアーマッハーの翻訳論は、決して単なる「翻訳戦略」のあり方について論議するものではなく、その核心はまさに「ネイション」の問題にかかわるものとヴェヌーティが見ているからでもある。「19世紀初頭、異質化翻訳には英語での文化資本が欠落していた。しかし、別の国民文化のフォーメーションでは、異質化翻訳は非常に活発であった。それはドイツ語である。ナポレオン戦争の期間である1813年、フリードリヒ・シュライアーマッハーの講演『翻訳のさまざまな方法について』は、翻訳を、プロイセンの民族主義的運動における重要な実践と見ていた。」<sup>28</sup>

シュライアーマッハーのテキストを読む限り、「プロイセンの民族主義的運動における重要な実践」ということは、たしかにそのように位置づけることは妥当であると思われるにしても、少なくとも明示的に見てとれるわけではない。むしろヴェヌーティがこのようなコンテキストのうえに、このシュライアーマッハーのテキストを位置づけて読もうとしているという表明と受けとめることができるだろう。ここではヴェヌーティの論議にこれ

26 Cf. Lawrence Venuti, *The Translator's Invisibility. A History of Translation*. Second edition. Routledge, 2008, pp. 83-98.

27 Venuti, *ibid.*, pp. 1-34. (Chapter 1 "Invisibility")

28 Venuti, *ibid.*, p. 83.

以上立ち入ることは控えるが、興味深いのは、初版が出版された1995年にヴェヌーティは、ドイツにおける翻訳の特質に関する視点を、とりわけ1977年にオランダで出版されたアンドレ・ルフェーブの編集によるアンソロジー（英語）と、1984年にフランスで出版されたアントワーヌ・ベルマンの『他者という試練——ロマン主義ドイツの文化と翻訳』（フランス語）から得ているのではないかと思われることである（ちなみに、ベルマンの著作の英語版は1992年に出版されているので、ヴェヌーティはそれも参照している可能性がある）<sup>29</sup>。ベルギーで生まれ、イギリスで学位を取得したルフェーブが翻訳における「ドイツ的伝統」を意識したアンソロジーを編み、フランス人のベルマンが「他者」をより優れたものとして志向するドイツの（ドイツ・ロマン派の）「翻訳欲動」を軸として、18世紀末から19世紀初頭のドイツの翻訳理論の特質をあぶり出そうとする。それらの試みを受けて、イタリア系アメリカ人のヴェヌーティが、ドイツの翻訳の特質のうちに内在する文化的非対称性の問題に焦点を当てる。これらはすべて、ドイツの外部からの視座によって試みられた考察ということになる。ベルマンは、翻訳がドイツ人にとって特別な意味と位置づけをもってきたことをドイツ・ロマン派の翻訳理論のうちに考察する著作の序文のなかで、その特質に対して、ノヴァーリスの言葉を援用しながら「ドイツ性 (Deutschheit)」という言葉を用いている。「いずれも十九世紀の端緒が開かれつつある時代になされたこれら翻訳[A. W. シュレーゲルによるシェイクスピア、セルバンテス、カルデロン、ペトラルカの翻訳、またシュライアーマッハーによるプラトンの翻訳、ゲーテ、フンボルト、ヘルダーリンによる翻訳]は、歴史的にはいずれも、ドイツの文化・言語・自己同一性にとり決定的だったひとつの出来事に世紀を遡って送り返される。十六世紀にルターが成し遂げた聖書の翻訳である。事実、この翻訳はひとつの伝統を切り拓いたのであって、翻訳行為は爾後——今日に至るまで——文化的存在に欠かすことのできぬ要素と、そしてそれ以上にドイツ性つまり Deutschheit の構成にかかわるモメントと考えられるようになった。」<sup>30</sup> もともと博士論文として書かれていたこの著作が、ドイツの文学的伝統における翻訳理論のうちに、ドイツ的な特質を浮かび上がらせようとすることは、きわめてもつともな、そして非常に有意義な仕事であるといえる。ここで指摘したいことは、そういった「ドイツ的」なもの、「ドイツ的本質」を描き出そうとするような議論の構成そのものが、ドイツ内部の研究者の側からはかなり提示しにくい性質のものだったのではないかということである<sup>31</sup>。

同じようなことが、日本のドイツ文学研究者・三ツ木道夫がドイツ翻訳思想のアンソロジーの編訳をおこない、近現代ドイツの翻訳思想についての著作を発表しているときにも、

29 André Lefevere, *Translating Literature: the German Tradition from Luther to Rosenzweig*. Assen/Amsterdam: Van Gorcum, 1977; Antoine Berman, *L'Épreuve de l'étranger : Culture et traduction dans l'Allemagne romantique*, Paris: Gallimard, 1984. (English version: *Experience of the Foreign: Culture and Translation in Romantic Germany*, translated by Stefan Heyvaert, Albany, State University of New York Press, 1992.)

30 ベルマン『他者という試練』25-26頁。(Antoine Berman, *The Experience of the Foreign*, p.11.)

31 その直接の証左となるかどうかはともかくとして、1963年に初版が出版されたドイツ人によるドイツ翻訳思想のアンソロジー (Hans Joachim Störig, *Das Problem des Übersetzens*) では、「ドイツ的」特質についての言及が見られないばかりか、翻訳思想をたどることの意義そのものについてもきわめて控えめな姿勢が目立つ。これについては、山口裕之「異質な言語との関係——ドイツと日本の翻訳思想——翻訳における複合的な非対称的力学のための序論的考察」、『総合文化研究』第24号、2021年、82-83頁参照。

当てはまっているように思われる<sup>32</sup>。三ツ木は、これらのアンソロジーおよび著作において、よく知られたベンヤミンの翻訳論へと流れ込んでいくようなドイツの翻訳思想の流れを思い描いている。「近現代ドイツ翻訳思想集成」として編まれたアンソロジーにおいて想定されているのは、「ベンヤミンの翻訳論の背景となっている翻訳思想の（ドイツ的な）特色」である<sup>33</sup>。また、著作『翻訳の思想史』の序章でも、ゲーテの時代に「翻訳思想の「ドイツ的な」伝統が形成されたように見える」と述べている<sup>34</sup>。三ツ木が「ドイツ的」伝統という言葉を使うときには、起点言語への忠実さを重視する立場（ヴェヌーティのいう「異質化翻訳」の方向性）のことを指しているが、こういった言葉を使うということ自体が、そもそもドイツ国外の研究者においてのみ可能であったのかもしれない。三ツ木は、ドイツの翻訳思想に関する研究は、「ドイツにおいても僅かな先行研究が存在するにすぎない」と指摘しているのだが、このような問題設定がドイツにおいては意識的・無意識的に排除されていた可能性がある。ドイツの翻訳理論の思想史的考察においては、対象そのものの考察と同時に、このような受容の構造そのものが翻訳思想史のあり方を規定する、という二重の問題設定が必要となるだろう。翻訳において「他者性」を志向すると位置づけられる「ドイツ的」特質は、「他者」のまなざしによってのみとらえられることが可能になっている、というある種の逆説的な状況がそこには存在している。

---

32 三ツ木道夫編訳『思想としての翻訳——ゲーテからベンヤミン、ブロッホまで』白水社、2008年。および、三ツ木道夫『翻訳の思想史——近現代ドイツの翻訳論研究』晃洋書房、2011年。

33 三ツ木道夫編訳『思想としての翻訳』3頁。

34 三ツ木道夫『翻訳の思想史』3頁。

## **The Beginnings of the Stigma: Discourses on Germanness and the Paradoxical Situation Regarding Studies on German Translation Theories**

Hiroyuki YAMAGUCHI

### **Summary**

In post-war Germany, it has been unthinkable to officially declare inclinations regarding a German identity. No German nature was supposed to exist, or if any did, to be evil. In reality, however, there existed a series of discourses about German characteristics produced by Germans themselves in the period from the beginning of the nineteenth century to the first half of the twentieth century, when a nationalistic consciousness arose in response to the relationship with France as an actual rival. The Stigma as seen in the self-denial of the Germans, arising from memories of Nazism, became entangled in studies of German literature (Germanistik) in a contradictory situation in which speculation on the characteristics of the national literature had to be avoided. The same seems to be the case with studies on German translation theories: characteristics of German translation theories are substantially discussed only by non-German researchers. The assertion that German intellectuals were ready to accept foreignness in their tradition of translation, in contrast to the attitude of assimilating the foreign, can be made, paradoxically enough, only from a foreign point of view.

### **キーワード**

ドイツ翻訳思想 トランスレーション・スタディーズ 翻訳理論 ドイツ性 ドイツ的

### **Keywords**

German translationtheories Translation Studies translation theories Germanness German